

植物の生活様式の適応

林 一 六

ふだん野外で植物をみているとずいぶんいろいろな種類があるものと驚く。私にはこの驚きが植物の勉強をしようという気持ちを半分支えている。いろいろな種類というのはここではいろいろな異った形をした植物ということである。この植物を形の異同をもとに整理していくという事柄も面白いしその間の類縁を考えるということも本当に面白いことである。ところで面白いのだけれども、その形をもとにしてこの植物は何という植物であるかという植物名を覚えるのが苦手で困っている。私的なことにわたって恐縮だが今年は植物の名前を覚えることにうんと時間を費やたいと考えている。それにしても現在の植物分類学は進んでいて他の分野の植物学徒を素人同様にしているらしいので困っている。とてもついていけないかもしれない怖れがあるからである。そのようにして植物の勉強をしたいのだが同時にもう一つの希望のようなものがある。それは植物の生活の仕方について観察することである。私にはある植物の種子は重いのに他の種類の植物の種子は軽いということが不思議でならない。種子に冠毛をもっている種類と持っていない種類があることが不思議である。地上の茎で殖える植物と地下の茎で殖える種類の植物ができてきたのはなぜであろうか。私はここで植物の生活様式のことを考えているのである。この生活の仕方が似ている植物は花の構造が似ているものもあるし異っているものもある。いままで花や葉やその他の形質でいろいろの植物の親類関係が研究されてきているが、それと同時にいろいろな植物の生活の仕方を比べてみたいと思う。そうすれば、形それだけをとり出してみると何の意味もないようなものが植物が種子から花をつけるまでの間に実にうまい具合に役立っているかあるいは役立っていないかをみつけることができる。それは植物の生活の仕方の適応である。

菅平高原の植物

横 内 斎

菅平高原は、主として小県郡真田町地域に属し、四阿火山(2332.9 m)と根子岳火山(2195 m)のコニーデ型の成層火山の南から西にかけて展開する、ゆるやかな斜面の乾燥高原を総称している。この裾野の終る所に神川の源流である大洞川の湿原が広がり、漸次ゆるやかに大松山の丘のような連嶺に上昇している。東西約9 Km、面積約50平方Km、高原と盆地性とをかねている。